

森のたより 夏

郷戸・岡・宮戸緑地等の保全活動と季節の風景、想いを綴ります。

絵・おおきみさ=シロツメクサ

緑地の四季

宮戸緑地のキツネノカミソリ ～守られてきた里山の風景～ 松永健司

キツネノカミソリは里山を代表する花です。ご覧になったことはありますか？

「昔は、そこらじゅうにあったよ！」と、お声がけをいただきましたが、現在、街なかで見かけることはありません。

開花は7月下旬から8月中旬頃まで。花びらは6枚(ガクが花びら状に見えるので本当は花びら3枚ガク3枚)、色は鮮やかなオレンジ色で目を惹きます。同じ仲間の彼岸花は田んぼの畦や河川敷に咲いているのをよく見かけますが、キツネノカミソリは林の縁に咲きます。春先に細長い葉を伸ばし、暑くなる6月頃には葉が枯れて本格的に暑くなる7月頃から花茎を30、40cmほど伸ばした先に3〜5輪の花をつけます。

キツネノカミソリはなぜ里山を代表する花なのでしょう？

里山植物とは縄文時代から始まった農耕を営む人々の暮らしの空間(＝耕作地や居住地で落葉かきや草刈りなどの管理がされた空間)と、林などの自然空間の狭間に生きる植物です。

私たちが管理している緑地では、定期的な草刈りや落葉かきを行っています。キツネノカミソリはどんどん増えて見事な群落を形成しています。どうぞ、この夏には宮戸緑地にお越しください。皆さまのまぶた、記憶にオレンジ色の花が鮮烈に残ると思いますよ！



宮戸緑地のキツネノカミソリ

朝霞は湧き水のまちです。青梅から狭山丘陵を経て、荒川低地までゆるやかに下り延びる台地。この東半分が武蔵

武蔵野台地、水の旅

小林一己

水と田んぼの記憶

野台地です。この台地東端に朝霞はあります。朝霞市はこの武蔵野台地末端をむさしのフロントと称しています。末端ではなく最前線と。

台地の末端は斜面になっており、これを崖線(がいせん)と言います。崖線には斜面林があり、そのすそからは台地内の地下水が湧き出しています。埼玉県の和光市から坂戸市にかけて崖線が伸びています。その台地の足元には、多数の湧泉があります。1980年代に埼玉県が調べた朝霞市内の湧泉は、市内35カ所あまり。広沢の池、水久保、谷山(たなやま)、代官水、岡湧水、東園寺、滝の根、子(ね)の神氷川神社などです。あさか環境市民会議が手入れしている斜面林、その根岸台には谷山湧水があり、岡斜面林でも湧いています。

お隣の新座市には、平成の名水百選・妙音沢という大規模な湧泉があります。練馬区大泉学園町の広大な台地の地下水が、黒目川の市場坂橋わきの崖線に一点集中し、膨大な地下水を湧出しています。これに比べ、朝霞の湧泉は散在し、どれも小規模です。広沢の池や滝の根のように、湧出が止まり、ポンプアップして水辺を維持するなど、涸れやすい湧泉群です。

朝霞を流れる黒目川も湧水の恩恵を受けています。四季を通じて安定した湧水を集めていたため、水車小屋はもちろん、江戸時代から伸銅業が発達し、大正・昭和と繁栄しました。

私たちが手掛ける三つの斜面林のうち二つには湧泉があります。湧泉のない宮戸斜面林には、遠く多摩川から導水された野火止用水の末端が引かれていました。ここに宮戸たんぼ予定地があります。ここは、みずとみどりのむさしのフロントです。

【熱烈募集】
仲間になりませんか？

= 定例活動 =

- 郷戸緑地 第1火曜日
 - 岡緑地 第2火曜日
 - 宮戸緑地 第4土曜日
- 時間：9～12時

※8月は活動休止です。詳細はホームページをご覧ください。



森からの 手紙

薫る風、田んぼの水鏡。 仲間と過ごす豊かな時間

渡辺やよい

里山クラブに所属してより、はや十数年が過ぎようとしている。環境市民会議発足時から岡、宮戸、根岸台八丁目の特別緑地保全地三か所をメンバーの一員として、下草狩り、間伐などをおこない、月3回の現地作業に心地良い汗を流している。

当初は「里山とは何ぞや」からの勉強会や他市の雑木林の見学・交流会、手入れ作業の手順など教えていただくことからの出発だった。でも現実には荒れ果てた岡斜面林帯を覆う葛（くず）駆除との戦い、根岸台の不法投棄の山、宮戸斜面林での竹の駆除と、放置された雑木林からの歩みだった。

現地に入り作業を始めると、ついつい目先の事しか考えず、何のための作業か見失いがちになるが、メンバーの一声でその時期ならではの山野草や生き物の観察時間、一息いれるお茶の時間と、この場所でしか味わえない豊かな時の流れ、手入れした次回はどんな楽しみを与えてくれるのか、ワクワクドキドキ、そんな気持ちにさせてくれる。この時期、6月の宮戸斜面林は最高の景色。新河岸川土手から風にゆらく緑の田んぼ、背後に豊かな雑木林、長い年月ひとの生活に寄り添って歩んできたこれぞ里山の原風景だ。

活動の 風景

長女は花輪、ママは草笛、 パパはバケツで…？

おおきえみ

朝霞在住の5人家族です。自然が大好きなママがきっかけで活動に参加しました。実家が遠く朝霞に知り合いも少なかった私たちですが、活動を通して地域の方とのつながりができ、子どもたちを温かく見守っていただけることに感謝しています。

春の活動では、長女がシロツメクサで花輪を作って遊びました。次女と末っ子は、虫を追いかけてリ草刈りを手伝ったりしながら、自然の中を自由に駆け回っています。ママも笹刈りに挑戦したり、カラスノエンドウで笛を作ってピーピー鳴らしたりと、童心に返って楽しみました。パパは稲の粃まき体験をきっかけに、自宅でもバケツで稲を育てています。

自然が好きな気持ちさえあれば、誰でも温かく迎えてもらえる場所です。子どもも大人も、それぞれの楽しみ方で自然と触れ合い、人とつながることが出来ます。



視点

いのちと地球環境

名無しのゴンベイ

1969年、アポロ計画で人類は初めて月面に降り立った。このころ、京都大学からNASA（アメリカ航空宇宙局）に行き、人工衛星の実験に携わった一人の研究者がいた（※）。彼のミッションは、ムラサキツユクサの雄しべの細胞で突然変異を調査することだった。ところが通常一列に連なって並ぶ細胞が、宇宙空間ではバラバラに分裂し、研究は頓挫した。地球上では、植物の根は重力方向に伸び、茎は重力に逆らって伸びる。無重力では、茎や根がその成長の方向を失う。NASAは、この事実を秘蔵し、公にされることはなかった。地球に水が大量に存在したことで、生命が宿った。植物の光合成で地表に大気形成され、過酷な陸上での生命維持も可能となった。海から陸に上がった生物は重力にも適応してきた。しかし、環境変化への適応は、個や種を超越した長い期間が必要だったことも忘れてはならない。突然、地球環境を飛び出した先に、命をつなぐ環境を作り出すことは、今の地球環境を守る以上に難しい。人類の未来に幻想を振りまく宇宙開発の現実には、尽きるところ国家間の軍事利用をはじめとした「情報」の独占ではないだろうか。

※市川定夫氏（故人） 京都大学大学院修了、米・ブルックヘブス国立研究所、埼玉大学教授。微量放射線、環境汚染物質、生体濃縮の研究。著書に「新公害言論—遺伝学的視点から」「環境学」など。このエピソードは、直接ご本人から伺った話をもとにした。

【イベント案内】



暮らしを支える身近な
ものについて知ろう！

山下英也氏 講演
千葉大学大学院客員准教授
2026/9/6（日）

10：00～11：50

場所：リサイクルプラザ
入場無料

★お申込み（前日まで）

090-3451-0381 松永

2026年7月1日発行
あさか環境市民会議会報第42号
会長：松永健司

お問合せ：QRコードを
読み取ってください。



編集・割付・挿絵：浅野里香
緑地の未来を考える会議が始動
した今夏、会報も再開！活動を
切り取り、思いを伝えます。